

星野直樹（満州国総務長官、のちの東條内閣書記官長）の推薦あって、昭和十年満州中央銀行に起用されて中央勤務から三か所の地方支店を転々として勤務した。

清廉にして直情、青竹割ったような気性であるが、人情豊かで涙もろいところのある人物である。

満州国に十年間勤務している中で、常人にはなし得ないと思われる難題に当たってこなした。

一つは、蒙古地区のハイラル支店及び洮安支店にいたころ、金融と流通施策について、旗参事官と相計り、畜産振興に協力して徳王始め民心安定に寄与したこと。

次は、新京駅の付近一帯の地主は、崔宇庭が官銀時代に二十七万円で質入れた土地を、とり戻したいという提訴があって満州中央銀行は困惑した。その時、生井氏は管財の総務主任として、稟議書をもって崔宇庭氏に懇請し承認をとりつけたこと。

その次は、孫呉支店長時代、ノモンハン事件で官民協力して生まれた団体の議長として物心ともに日満両軍に援助活動を実行したことなどなどである。

彼は、これが正しく是なりと信じた際は水火を辞せず猪突猛進する型の人、満州から引揚げて、あるものはこれ一つだけだと、満州建国功労章を示す八十歳とは感じない意気軒昂、呵呵大笑するさむらいである。

（他）引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

無条件降伏の陰に

栃木県 岡村 善四郎

若人には夢がある。青春の血潮を燃やしながら進む若人の前に苦難の壁は無い。若人は大志を胸に黙々と夢を追い未知の世界へ夢を広げ留まることを知らない。昭和七年暮、私はいつものように新聞を読み出した。何新聞だか広告欄に変わった広告を見付けハッとしたり読み返す内に熱気が体中を駆け回るような衝撃が起こった。秘かに求めていた希望の光をそこに見つけ出したのです。

広告の大意は……近々開校する学校の学生募集の広告で開校は昭和八年四月しかも学校建設地が満州国吉林省寧安県鏡泊湖畔、名称は満州鏡泊学園と呼称する学校で、目的は新國家滿州國を眞の王道樂土、五族協和、平和で豊かな理想の國造りに協力する。その根幹となる人材を養成する幹部候補として学生を募集する広告であります。私は満州について、大都市や有名地を七つ八つは知っているが地理的には皆目不明、まして寧安県鏡泊湖となるとさっぱり見当もつかない。躍る心を押さえこの広告の掲載主である東京世田谷国士館大学事務局、広告内容の明細資料を請求した。

私はそのころ志願入隊した飛行隊を除隊、就職についてあれこれ模索中でした。除隊の理由は次の通り……私の先輩に機械関係専門の人がおりました。ある日その人がこんな話をしたので。「科学万能時代が進むにつれて次は交通交易その他すべてが飛行機に頼る。すなわち飛行機時代がやって来る。若い内に操縦士の資格を身に付けて置くと将来きっと役に立つし新職業として第一線で活躍出来ると思うが君はどう思

う……希望があるなら飛行隊に志願し軍の飛行学校に入るのが一番早道だ。」

先輩の眼が爛々と輝き私の心を揺り動かししました。私はその言葉に共鳴し、徴兵検査に飛行隊を志願、希望通り飛行兵とし合格しました。早速拓大を中退し岐阜県各務原飛行第一連隊へ入営致しました。各務原は戦闘機隊でしかも単座戦闘機でした。毎日上官殿の飛行訓練を眺めていると胸が躍り、自分も早く一人前の飛行操縦士になってやるぞと力が入り、毎日の苛酷な軍事訓練も何のその少しも苦になりません。中隊当番の日、人事係准尉殿に会いお話する時間がありましたので、操縦士についてお話し上げましたところ大変喜ばれ操縦士にはいろいろ条件があるが特に視力が大切なのでお前の視力はどうか……下士官になると操縦士受験資格が認められるところのお話でした。私は勇み立って早速視力検査を受けましたところが何と戦闘機操縦士には視力が不適合と判明、これではせっかく志願入隊し下士官になる意味が無い。思い切って現役満期除隊した次第、操縦士は断念したが一般の人がまだ

飛行機に塔乗しなかつた時代空中戦の訓練に参加、スリル満点の醍醐味を体験することが出来ました。

五、六日たつて請求した満州鏡泊学園の資料が届きました。書類を開いた瞬間、胸が高鳴り「コレダ」これこそ私の求める道であり男の進む世界だ。生気がたぎり顔がはてり出した。

一気に読み終わり繰り返し又読み、直ちに入学願書の手続を済ませ選抜試験の日を待つ身となりホッと一息、この試験には何としても合格せねばと一人意気込み我慢し切れず長兄に事の次第を話したところ、よし頑張つてやれと力づけてくれました。

選抜試験は国土館で実施され、合格通知が届くまでの時間の長かった日々には閉口した。

昭和八年四月一日入学、全寮制宿舎に入った。

いよいよ今日から待望の満州鏡泊学園学生であり、その課程が始まると思うと心が弾みすべてが楽しい。ここでの教育は渡満までの短期間に現地で直接活動出来るよう、学課外必須科目の実務訓練を行うことになつていた。科目は学生各自希望科目を選択直ちに勉

学に入った。

ある日の朝礼で渡満の期日発表があり、学生の意気大いに揚がり各科目班別の実習も真剣で熱が入つた。

又ある日の朝礼では吉林方面現地の状況など報告があり身の締まる日もあつた。

私は偶然のことから学園の給養係を依頼され、給養主任先生の補佐することになった。

私達給養班最期の実習は、東京深川の陸軍糧秣廠に泊まり込みで食パン作りであつた。見事な仕上がりで五百食分の食パンを焼き上げた。

私は学園に入学した時、この学園の創設者であり指導者である山田悌一総務先生がいかなる人物か知らなかつたが、給養係となり炊事指導員亀山氏と懇意になり、山田先生の経歴など拝聴し当代まれに見る高潔高邁な理想を持つただならぬ人物であることを知り、選んだ道が正しかつたと合点致しました。

出発が近づくにつれいくら学生でも何かと心忙しい。知友や親元へ離別のため帰郷の旅が許され、いよいよ八月一日東京出発の日を迎えた。昼ごろ全員東京駅集

結、関係者多数に見送られ、山田総務先生以下二百人東京駅を予定通り出発、一路満州吉林省敦化へ向かった。出発の前日、徳富猪一郎（蘇峯）先生の激励講演があり「餓はなむの辞」を頂きました。その一節に私たちは感新たに啓蒙するものがありました。大意次の通り……『私は多くの専門の先生方の研究文献を調べました。その結論として、私たち日本民族の主体となつた先祖は遠い昔の昔、満州の吉林盆地周辺に住んでいた亜細亜人と考えられます。その人たちが南下し長い歳月を掛け山を越え野を越えてたどりついた所が日本列島だったのです。皆様はそこへ行くのではなく先祖の地へ帰るのです。』

吉林の現地へ着きましたなら、先祖と同じ血を引く現地の人たちとどうか仲良く助け合つて豊かな国造りをして下さい。私も年がもつと若ければ皆様のお供をし、先祖の地をこの足で確かめ、現地の人々と語り合いたく思いますが、体が自由に動きません。残念ですがお供出来ません。どうか私の分までお願い致します』（当時蘇峯翁七十歳）

学園建設の地がこのような地域とはうれしい驚きでありました。又、吉林省敦化寧安鏡泊湖地方に関する歴史及び人文地理学の論説は更に感動を受けました。渤海王国と奈良平安時代（西暦七三三年～西暦九三五年）の交流などなど。

渡満の旅は途中つつがなく八月十一日予定地吉林省敦化に夕刻着き、薄暗い泥道を通り城内の仮設宿舍兼教室に入居致しました。

初めて起居する満州の家屋はすべてが驚きでした。今日から学園建設の第一歩が始まるのだと思うと身が引締まり、第一夜は思い出の数々が脳裏を去来し、感慨新たに無量の一夜であった。寝付かれぬまま朝を迎えた。給養係として今朝からいよいよ本番である。仲道が今朝から給養係に配置され、上杉給養主任共々四時起床、忙しい第一歩を踏み出した。

炊事の水汲みなど雑用は現地の労務者が引受けてくれた。

敦化に来て今朝は第一回目の朝礼である。鏡泊学園建設予定地鏡泊湖周辺の治安交通気候など諸状況の説

明があり、現況下では当分鏡泊湖畔進出は不可能、匪団の掃討鎮圧が終了するまでここに待機とのことであつた。

鏡泊湖敦化間の距離は約百キロメートル、現地を前にして聞く毎朝の話には迫力があつた。早く現地へ移動許可が出るよう願うのみ。しかし私たちの生活は無為の日々ではない。中国語の学習を始め各班の作業は本腰になつた。私はこの間敦化県公署の特別計らいで、敦化駐屯滿州軍兵舎へ四時から滿州料理実地見習いに通つた。

北滿地区は吉林省行政管轄内であるが、建国日浅く未開の地で昭和六年滿州事變の折、日本軍は「緑森の王者」とうたわれた。王徳林兵匪に散々な目にあつた地域で、今なお多くの配下兵匪の割拠地であつた。

昭和九年二月、待ちに待つた鏡泊湖畔進出許可が出た。学園一同欣喜雀躍、移動準備に掛かつた。私は給養の關係上敦化宿舍の給養關係雜務を仲道に頼み、鏡泊湖畔進出第一陣移動隊五十人に参加、学生隊は日ごろ訓練の隊形を整え武装いかめしく日滿護衛軍と共に、

敦化の人々と名残惜しみつつ多くの人に見送られ鏡泊湖畔へ出発。湖畔に着いたのは昼ころであつた。

休む間も無く私は直ちに炊事用意に取組んだ。

私は昨年十二月二十五日現地調査及び寧安県公署連絡隊に参加、初めてこの地に來た時、ただ、真つ白すべてが雪と氷の世界、一人見当たらず原始の清らかなたたずまいの中に広がる鏡泊湖、その姿の余りに神秘的静けさに胸を打たれこが自ら望んでやって來た第二の故郷、夢にまで描いた湖、感嘆の余り呆然目失、寒さも忘れ立ちすくんでしまいました。所々雪の無い湖面は誠に鏡そのもの。

山田総務先生が学園建設地として選んだここ鏡泊湖畔周辺は、正に清純にして聖域たる事に改めて敬服し次第です。

仮宿舍は前もつて現地の世話人が用意してくれた湖畔に面した湖沿屯の七、八軒の農家で、私たち中隊付人員は第一小隊宿舍右側に張り出した急造の一室であつた。

炊事關係は取りあはず鏡泊学園本部先生方の宿舍土

間を利用、水は湖の水を直接汲みあげ天秤棒で運び、薪は切り出した長い雑木を二ツ切りにして使用。

本隊が統々移動到着、三月半ば全員移動完了。土間の炊事場で一回に賄う人員はせいぜい七、八十人が限度。学園が湖畔進出後、第一番に手掛けた建造物は炊事場（三間×五間）、続いて入浴場（一・五間×二間）、炊事場には大釜四基を据え付け準備完了。給養主任上杉先生はじめ給養係及び各小隊二人の当番と共に本番の現地給養が開始された。私は主任と十日ごとの献立表を作った。ここに学園は本来の態勢を整え、毎日の朝礼も凍結した湖上から炊事場前の広場に移り、活気に満ちあふれた日課が始まった。

朝礼で歌う学園歌の斉唱は心の叫びとなって鏡泊の天地を揺がし、木霊は遠く未知の峯々に響き渡った。各作業班の活動は日増しに活気づき、土木班の水田灌漑用水路工事は学園仮宿舍東方四キロメートル地点、尖山子独立峯山麓から約二キロメートル本式水溝であった。ここには松乙溝の流れに沿って水田開拓可能地が約百町歩（百ヘクタール）ある。無電班は教化吉林寧

安方面との交信を確保、軍用鳩、軍用犬の訓練も順調、周航班の第一鏡泊丸は鏡泊湖創造以来初めて湖上に浮かぶ動力船である。エンジンの音高らかに響かせながら湖上を走る姿はまさに世紀の新しい明であった。木工班は続いて厩舎、雑庫、豚舎を完成、鏡泊丸は岸から二十メートルほど突き出した棧橋に係留非常連絡に備えた。対岸南湖頭部落まで湖上約三キロ、耕作は全員協力右に左に大活躍、学園の実務業績は生き生きとした学生の自覚ある勤労にあり、これ又順調に伸び、この分なら暮からの食糧も確保出来る。治安は日満兩軍の駐留のおかげで平穩。この間山田総務先生以下本部長は地形調査、住民との交流など毎日が忙しかった。

学園建設予定地裏手に連なる峯々は「二龍山」と呼ばれ、麓から湧き出す泉は「金明水」、東端の湧き水は「銀明水」、棧橋は「吟月橋」、学園並び関係者各位の靈園は「御靈ヶ丘」と命名。総務先生は風貌に似合わない詩情豊かな半面のある人であった。又、隣人の親しさで私たちをねぎらう優しい人でもあった。

学園はもともと何人とも争ったり、事を構えたりす

る考えはない。衛兵歩哨勤務は万一の場合自己保全のためであり、まして付近に潜伏すると聞く匪団と争いを起こすなど毛頭ない。

五月半ばの北滿寒冷地水田農業は播種の適期で、学園水田も現地朝鮮農民を指導員とし水稲直播の講習を受けた。私も初めて直播水稲の秘伝を習得した。

昭和九年五月十四日、山田総務先生は公務のため、総務以下十四人と共に寧安県公署並び、関係機関へ諸手続など公務書類届け出のため早朝四時学園の自動車に同乗し湖畔学園本部を出発した。

西津袈裟先生の後日談に依りますと……山田総務先生は届け出終了後、湖畔周辺を支配地とする陰の権力者元王徳林兵団配下の頭目某数人と、学園の目的などに付き懇談協力を頼む手はずで、その筋の某により手配が整えられ、土産の品物まで用意された由。

帰園は遅くとも五月十七日、その十七日も何の音さた無く、帰りを待つ学園一同に不安の影が差し始めた十九日の昼ごろである。

私たち給養係は昼食の準備で多忙であった。……歩

哨の一人が何やらわめきながら農民風の部落民二人を連れ駆け込んできた。……東京城の帰り大廟嶺で自動車と兵隊の死体十二、三人を発見したので届けに来たとのことであった。

学園警備司令小池始め留守役一同は事の次第を察知、緊急全員集合の伝令を各作業場へ飛ばし、学園救援隊が直ちに編成され、日満軍護衛隊と共に未踏の地大嶺へ急いだ。私は至急三人の給養班員と糧食を準備馬車に積み救援隊に続いた。現場に着いたのは夕闇に閉ざされた時刻であった。

山田総務先生以下各位、生存の祈り空しく現場は屍累々凄惨地獄絵そのものであった。学園救援隊はただ茫然悲嘆の底に沈んでしまった。悲報は伝書鳩により直ちに学園本部無電班へ伝えられ、小野田無電係は緊急「SOS」を発信、この報はたちまち日本全土に伝えられた。

私たちは御一同の亡骸を現場で茶毘に付し用意の白布に包み納めた。

指導者山田総務先生以下無言の帰園を迎えた学園一

同の悲しみは改めて申すまでも無い。

一同は悲痛と苦しみを涙に包み、気を取り直し湖畔最期の法要を営み分骨を「御霊ヶ丘」に祭り納め、ご遺骨は教え子の胸に抱かれ鏡泊湖畔を後に母国故郷へ旅立ちました。

一行が立去るとさすがの学園健男児も落胆疲労の色は隠せない。十日二十日が経ち学生は再び志気を取り戻し、明るさがよみがえったが警戒は更に厳しくなった。周囲の治安がただならぬ気配になって来た。時には夜を徹し警備線の守りに付き昼は仮寝の始末、田畑は野鳥の餌場と化してしまった。そのただ中、朗報が届いた。近々第二期生入鏡するとの報である。この朗報もつかの間、二期生は鏡泊湖近く「ソオチオーシ」の地点で匪襲に会い散々苦勞の末六月半ば学園に到着した。

湖畔の治安が一応平穩に戻ると予定通り学園建設第一期工事が開始され、学生宿舍、入浴場兼講堂、炊事場、雑庫、無電室が新築落成し九月末湖畔各部落の多くの人々を招待し、落成祝賀の宴を開催、また記念の

スポーツ大会には各部落が団体チームを作り競い合い、これまで初めてのにぎわいとなり、和氣藹藹のうちに楽しい一日が暮れた。この学園の催しは、部落民に私たちの存在を身近に、又、信頼感を深めるに役立った。しかしこのころから学園の糧秣は日ごと欠乏に傾き、一週間の献立表も作れず、その日その日の炊事で給養係の苦勞は我ながら情けなかった。

年が明け農耕期前にどうにか糧秣が補給され学生一同元氣回復、各班それぞれ業務に励み出した。給養関係は豆腐作り、味噌の製造に掛り野菜なども上々、越冬貯蔵庫も完成、この分なら今年の暮は安心とその折も折、学園経営は資金面にも行き詰まり、お手上げ寸前の状態とは知る由もなかった。詳細内情報告を聞き一同がく然……。

山田総務先生亡き後、学園運営資金皆無となり、昭和十年十一月二十一日鏡泊学園は最初で最後の卒業式を挙行と同時に解散悲痛極りなし。

学園創立以来わざわざ三か年理想を掲げ亜細亜全土の炬火きまとならんとした志も挫折寸前の姿となった。悔し

いが私たちには救う術が有りません。しかし三か年間に培われた学園魂は再興の絆を更に堅くしてくれました。

学生会はこの日に備え各自の進路について希望をまとめ、関係機関の了承を得てありました。現況下湖畔の元学園宿舍残留許容人員は耕地などの種々関係上三十余人が限度、また学生会は今後の連絡機関として鏡友会を結成、本部を残留組内に設け、機を見て鏡友会を開催すること。鏡友の心の故郷湖畔の聖地「御霊ヶ丘」の守護を頼むなどを申し合わせ、各目的地へ進出して行った。

同志の去った元学園宿舍は物わびしい湖畔残留者はわずか二十数人、早速鏡泊学園村を創設した。私たちは残留組は心をついにしその日から苦境に立向った。業績は遅々として上らないが、たゆまぬ努力が実り自給自足の道がやっと開け生活安定の兆しが見え始めた。その名ばかりの学園村に満州拓殖公社が協力の意を示し初めて私たちは湖畔最初の動力精米機を手にするこ

とが出来た。営農も一歩一歩本格的に進展生活の基盤

も固まり、各人も家族を呼び妻を娶り、曲がりなりに学園村も徐々に村の形態を整え出したが、治安なお定まらず内外多端の日常であった。

満州開拓の父と関係者に崇め親しまれた関東軍司令部付満州国軍政顧問東宮少佐が、関東軍参謀部第三課占有地行政担当参謀の秘令を受け、私たちに對し解散し湖畔を撤退するよう撤退工作にやって来たのはこの苦境どん底の昭和十一年三月初めであった。「辺びな奥地で生命を危険にさらしながら細々と農業を営み、生活を続けることは常識を逸脱した無謀行為としか言えない。参謀部はこの無謀を黙認出来ない。一日も早くこの地を撤退するよう」：（以上東宮少佐の説得大意）。……私たちはただ血気にはやり、分別を忘れたのでは無く、学園で培われた不退転の信念を持って、行動は計画的に、いとわぬ勤労精神、私欲を捨て五族協和の願いを実践しようと、盟友同志と誓いを立てて頑張っているのです。私たちには何人に対しても、人種国籍貧富による偏見差別は有りません。理想の楽土建設に役立ちたく勤めているのです：（私たち学園村

の申し上げた大意)。

東宮少佐は退去説得どころか、私たちの何をどう感じたのか、その意気で大いに頑張っつて本来の目的に向かつてまい進するよう、激励の言葉を残し湖畔を立ち去りました。

その後、関東軍占有地行政担当官は私たちを特種移住者とし、残留を認め治安維持のため一個小隊を常駐させました。私たちは直ちに鏡泊学園村と墨痕鮮やかな表札を掲げ、鏡泊学園村は天下晴れてここに誕生独立致しました。

学園村はこれを機に新たに南湖頭に水田二十町歩(約二十ヘクタール)、耕地の拡充、家畜類の導入、漁業、油房など日増しに内容を整えますます安定した経営に発展、湖畔農民に分譲した大豆の新種は収量多くたちまち大評判となった。

昭和十二年五月学園村は学園伝統の後継者養成の目的で学園村塾を開設十八人が入塾。塾はすべて学園村の給費により全寮制、晴耕雨読の教育法を採用、水城先生が塾頭となり数人が補佐しこれを指導した。

塾開設の噂はたちまち識者の知るところとなり、塾の実態調査見学など塾の存在は多くの人の関心を寄せることになった。

私たち三人(田島祐郎・豊島八十二・岡村善四郎)が満州拓殖公社の委託を受け義勇隊安大訓練所建設先遣隊の仮宿舍設営に協力したのは昭和十三年一月から四月半ばの期間であった。その後、何の縁か昭和十四年二月満州拓殖公社は、元鏡泊学園宿舍に寧安訓練所の義勇隊員三百人を移動入居させ、鏡泊学園訓練所と呼称した。私たちはこの隊員が私たち学園の後継者として成長することを期待、学園から所長西津先生、教育指導員三人(豊島・島田・向井)を専任、隊員の入鏡を大歓迎した。またこれを機に私たちは満州拓殖公社関係の雑務を清算し、この宿舍を義勇隊に譲り、ここより北一キロメートル付近に新たに学園村を建設した。学園村は面目一新しここに移転完了した。なお南湖頭水田班宿舍は二戸建住宅二棟増築、旧宿舍は塾生の実習訓練宿舍とし、ここに学園村は本来の姿を取り戻した。そして学園村は名実共に大地に根を張り自給

自足生活の安定を確立致しました。私はここで本業である農産加工を開始した。自分たちで作り収穫した穀類、豆を原料として作った味噌醤油を味もよく、我ながら見事な出来栄えであった。

新宿舎に移転した当初湖畔部落の婦人たちと学園村の婦人たちが協力し合って綿羊から糸を紡ぎ、塾生の防寒帽始め手袋などを編み上げる様は日滿一帯、誠にほほえましい光景であった。私たちもその恩恵にあずかった。

昭和十五年八月山田総務先生頭彰並び殉難各位の慰霊碑が学園村及び遭難現場に建立され、関係者及び部落民多数出席、除幕式が盛大に執り行われ、学園村並びに学園村塾の名声は一段と評価され、塾生の意気ますます盛り上った。

昭和十六年の秋、西津所長、並びに豊島、向井、島田三指導員は鏡泊学園義勇隊訓練所を辞任、満州拓殖公社職員が所長となり、訓練所はその名称を鏡泊湖義勇隊訓練所と変更した。

平和な鏡泊湖畔に戦争の不穏な空気が身近に感じ、

漂い出したのは、穀類供出令が伝達された昭和十七年ころからで学園村は数トンの米、大豆の供出を完了出来て誠にうれしく有り難かった。そうこうするうちに不穏な影はついに現実となった。

公務出張のまま召集される者が始め、塾頭の田中もその一人で、塾頭不在となり、塾頭の代りを私が引き受け塾生の世話に当った。

そのころ、私は対岸南湖頭水田班係として南湖頭分村にいた。さいわい塾修了生の高山（塾二期生・朝鮮青年）が母親と隣り合せに住み、私を助け水田労働者を指揮し水田は上々の作柄であった。

昭和十九年早春三月突如、湖畔を揺るがす大事件が起こった。寧安県警務科特務班により各部落の村長以下村の指導者全員が根こそぎ逮捕投獄され、村々はすべての機能が停止状態となり、部落民はその理由も知らされず、ただ恐れおののくばかり、そして学園村に助けを求め泣きすが始末であった。

私たちは直ちに塾生を各地に走らせ内情調査に乗り出した。調査が進むにつれ意外な事実が判明した。

逮捕の理由は……「村長たちは匪賊と共謀を常とし満州国の崩壊工作謀議を重ねていた」……との事実無根の官憲の策であることを把握した。学園村は代表をたて関係機関に逮捕者全員の釈放を請願、交渉は初めから難航、警務関係者の対応は一方的でかたくなで耳を傾ける者は一人も無い。私たちは各機関に在職する鏡友会員並びに知友を動員、釈放を訴え人道的処理を求めたが、釈放請願運動も好転の兆し無く一年半が経過した。

昭和二十年三月末、赤鹿部隊入鏡（司令部を南湖頭学園分村裏高麗城跡に設営）し侵攻ソ連軍機甲部隊の進出阻止の陣地構築開始と共に、昨年五月ごろからうわさだった日本軍不利敗色の影が重くのしかかり、得体的知れぬ不安の日々となった。しかし私には大きな仕事が続いていた。香川開拓団半截溝部落の厚生を依頼され、その第一期事業とし水田開発を近々開始する手はずで、既に人員など準備は暮のうち完了。香川開拓団半截溝部落近くに水田開拓可能地が約三十町歩（三十ヘクタール）あり、そのうち今年十五町歩開拓

の予定であった。五月播種を前に学園水田共々多忙である。

戦況不利のうわさは不気味に流れ不安のうちに五月開東軍の根こそぎ動員があり、続いて開拓地の緊急現地召集、学園村も男手皆無の状態となり、やむをえず塾を一時閉鎖塾生を親元へ帰省させた。（当時塾生は二十五人いました。内二人は残り終戦まで学園村の業務を受け持ち私達を助けてくれました）

そのころ逮捕投獄中の部落の面々は……学園村人のただならぬ正義感と不退転の気迫に、警務関係各位はかたくなな考えの非を悟り、再考再吟味の上全員（事故死一人を除く）無罪釈放となり無事帰村することが出来た。しかしこの事実を私たちはだれ一人知らなかったが、この事は湖畔周辺部落民に学園の何たるかを心からより深く知らしめると共に、命の恩人として尊敬され親しまれるようになっていたのです。

ソ連軍ソ満国境突破南下中とうわさの正否は分からないが、私は学園村本部に急行し、鈴木村長と協議万一に備え、全員を集め事態を説明、村長は真剣な表情

で、覚悟はできていると思うがと用意の手榴弾を取り出した。

私が終戦の確報を知ったのは昭和二十年八月十八日であった。赤鹿部隊の顔見知りの憲兵殿が二人船着場からやって来た。……今対岸の石頭河辺りでソ連軍使から降伏命令書を受領して来たところです。赤鹿小將部隊長殿は既に無電でご承知の事ですからこの命令書の封を切って見ましようと思つたのです。私はびっくり……命令書はザラ紙半分に日本語で書いてあった。……大意……赤鹿部隊は直ちに武器を放棄し我が軍に無条件降伏すべし。

一九四五年八月十五日、北東満地区司令官

瞬間、私は足がふらつき、心臓が止まる思いで体中の力が風のように抜け去りました。学園村塾は興亜の志空しく万事休す。満州国共ここに消滅、断腸の思いただ無念なり。邦人の受難はこれから始まった。

侵攻進撃するソ連軍の前に道義も人道も影を潜め、日本軍が投降した後の湖畔は非道が罷り通る闇の巷となった。あてどもなく避難者の群れが、ソ連軍の合間

を縫って南へ南へ続く。学園村の一同はさいわい部落民に助けられソ連兵の難を逃れ東京城収容所に入った。そのころ私は南湖頭部落に潜入、塾出身の盧一家並び部落自警団に助けられかくまわれたが、ソ連密偵に探知され、ソ連軍に逮捕され日本軍スパイとして吉林方面軍教化仮軍事法廷に引き立たされ、九月半ばから十二月敵寒の半ばまで、仮獄舎の中で夏衣一枚のままよくも生き続けられた。病気のため仮釈放され教化日本人分会へ病氣回復まで預かりの身となった。

散々苦勞の末湖畔にたどり着いた私は、無論学園村の人はだれ一人いないと覚悟して来たのに、何と学園村の人たち初め多くの人が越冬のため東京城収容所から湖畔に帰されて来ていたのです。一同に迎えられ学園村の仮宿舎に入った。安心したせいか二、三日すると疲れが一度に出て三、四日飲まず食わず寝たきりの日を送り年末やっと歩けるまでになった。

昭和二十一年ソ連軍が撤退し中共軍が治安維持に入ってから何とか治安が始まった。私たち避難生活宿舎にも、ソ連軍の勞務から釈放された仲間がぼつぼつ

帰着、相談の結果越年を覚悟で水田耕作に掛った。私も病身を押し六月から漁業の手伝いに参加したが一月持たず再び病床の身となった。

八月引揚げの朗報が届いた。今度の通知は本物であった。私は食欲も無く別室の床でこの知らせを聞いていたが体が利かず死を覚悟で帰国を断念。

出発は予定通り早朝から始まった。部落民と別れを惜しみつつ帰国の旅立ちである。私は他人事のようにこれを見送っていたら、漁業部の田島が「部落の連中が馬車を用意してくれたから荷物の上に乗って帰ろう」と私を抱え上げてくれた。別れはつらい、世話になった部落の人々にお礼もそこそこ東京城に着き……牡丹江、ハルビン、長春、奉天、渤海湾のコロ島港、この港より元日本軍艦に乗船、大陸を離れ日本へ向かった。途中長い旅路どこをどうして来たのか思い出せない。ただ牡丹江で貨車を待った数日と乗船前の夜の夜空、大陸の最後の思い出だけが目に浮かびます。人間には意識外に動物的生命に対する本能があるのか途中よくも倒れず皆様に付いて来たとします。博多

に上陸、故郷の栃木氏家に着いたのは九月十日ころでした。

手術や何やら一か年余月、療養生活を送り体力が何とか回復したのが昭和二十三年晩春のころでした。無理の利かない半病体では何も出来ません。友人たちに「命あつての物種だ」と慰め励まされ気を取り戻しました。しかし生家をよいことに頼って暮らしては出来ない。自分の生計ぐらいいは自力でと東京上野下谷の職業安定所を訪ね職を求めました。私の申し出た条件は「職は選びませんが住込み労働の出来ること」などと虫の良い就職口はありませんでした。係員が気の毒そうに「一つあるが障害者のあなたにはお勧め出来ません……上野の地下道の靴磨きの席が……栃木は遠いし通うには……私は就職を断念、腕に覚えのある畜産をと腹をきめ、郷里の知人の林野を借り種豚の生産に掛り、生活も細々食うだけにこぎ着け妻を娶り一男の親となった。妻はある会社の労務者となり二人三脚苦境を乗り越え、気の合う仲間四人と鶏卵の出荷組合を作った。当時この地方の養鶏農家は個人がばらばらで

鶏卵は仲買人に買い叩かれるのであった。この生産者と連携し東京出荷を始めた。私たちの出荷量は少なかったが、品物が良心的と評判で競値はいつも上々の値であった。東京神田市場も当時は品不足で中には不正荷主もいたのでしょう。出荷が順風に乗る、いよいよ本腰をいれ始めたその矢先「好事魔多し」の諺通り、出荷先の〇〇商事会社が倒産し、私たちの「なけなし資金」の出荷組合はまともにその影響を被り解散の悲運となりました。

私は再び細々養豚を続け貧しい夫妻二人三脚、辛抱生活の旅が始まりました。しかし苦勞をいとわず十年二十年……と経つうちに最低の生活も何とか安定し、長男も良縁に恵まれ平々凡々のうちに孫二人一家六人の家族となり、一同元氣平安、そろってだんらんの日々を迎える日々となりました。

この間町の人々は、何ひとつ取り柄の無い私たちの黙々としてたゆまず励む姿を何と評価したのか、私も町、県、国の首長及び公共機関から表彰、感謝の諸状を頂きました。私はただ生還の喜びを胸に、恩師先哲

の教えを守り、日常生活に悔い無きよう努力し励み、公共に奉任したに過ぎません。誠意、勤勞、見識、氣迫を一生の信条として。

【執筆者の横顔】

栃木県農家生まれの岡村氏は中学を卒業して前途いかに処するか様々な夢を描いて思索していたところ、新聞紙上に大亜細亞建設へ人材養成の満州国文教部第一号で大学令による、鏡泊学園を創設する。とある。

早速これに挑戦して合格、昭和八年四月、国土館で入學式にのぞんだあと四か月間国土館の高等拓殖専門学校の委託生、八月に勇躍渡滿し、教化県城に入ったが、鏡泊学園現地には、いまだなお治安おさまらないとのこと、関東軍の命により教化の満州国軍兵舎で研學と訓練をうけながら越冬して待機した。

翌九年二月、いよいよ教化県城から現地の鏡泊湖の湖畔にある学園建設地に到着、学園には色々な役割があったが、岡村氏は山田悌一総務付きで給養班長として学園の生活設計の羅針盤をもっている責任者に任

じていた。

何ぞ知らん、この年の五月十六日、山田総務一行は東京城から食糧を山積みして学園現地に帰途中、大廟嶺で匪賊に待ち伏せをうけて十五人全員戦死をとげた。

学園は全員、岡村にとつても天地がくつがえり、全身の力が抜けてゆく感じがした。

翌十年十一月学園卒業式に臨み、その後関東軍司令部の指示もあり、満州鏡泊学園は解散した。同時期に約二十人の同志相謀り、鏡泊学園塾を開設し、日、満鮮の青少年に晴耕雨読の教養訓練課程で研修道場として存続した。この仲間に岡村善四郎氏も悲壮な決意で参加した。

一九四五年（昭和二十年）反満抗日の共同謀議の容疑で、当時の鏡泊村の程村長ら村の幹部四十三人は政治犯として検挙され、治安維持法の下で死刑の極刑判決をうけたので、学園同人、岡村氏らの奔走で刑執行寸前で中止され、救命された事件がある。これこそ日中友好運動の最たるものである。

運よく、引揚げてこれたのは、鏡泊村の満州農民の

友情のおかげである。そして、栃木県の故郷に着いて、両親並びに家庭の協力を得て、養鶏、養豚、乳牛、加工などなどに力の限りをつくして生活の確立に努力奮闘し、今ようやく家族だんらん、過ぎ去りし悪夢のような引揚時の死線を越えてきた労苦の生々しい体験を悟り伝えながら戦争は再びくりかえしてはならないと説得している。

彼は、身体障害者でありながら、地区産業振興に奇与したとの市長、知事、団体から感謝状、表彰状を受賞している通り、岡村氏の堅忍不拔の精神と研鑽された人物として高潔、高邁なる引揚者の理想像が浮き彫りにされている。

（出）引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助